

聖書:ルカの福音書10章17~24節

説教:名が天に記されていることを喜びなさい

はじめに

福音書を読んでいると、イエスの語りかたが普通とは異なっていて、いったい何を言おうとしているのかわからなくて、あたかも森のなかで迷子になってしまったように思うことがあります。

ここもそうです。イエスはあるとき、七十二人を二人一組に分け、財布も持たせず、靴も履かないようにと注意を与えてイスラエルの国内宣教に派遣しました。それからおそらく数ヶ月ほどの期間経って皆帰ってくると、大喜びで、「主よ。あなたの御名を用いると、悪霊どもでさえ私たちに服従します」と報告します。そんな弟子たちにイエスはいろいろなことを語ってくださるのですが、いったいなにを言おうとしているのか、なんとなく方向はわかる。けれども自分が今どこにいて、どの道をたどればよいのかよく見えない。そんな感覚です。イエスが伝えたかったこととは何か。ともに考えて参ります。

1 疑問

1) ちょうどそのとき

わかりにくいことはたくさんありますが、その中から今日は二つのことを取り上げます。一つ目。21節の冒頭にある「ちょうどそのとき」です。どうしてこれが疑問なのか意外に思うかもしれません。でも、イエスが聖霊によって喜びにあふれて父なる神に祈る場面は、他の福音書も含めてもここしかありません。それほど特別なことが「ちょうどそのとき」に起きたのですから、「ちょうどそのとき」というのはやはり特別な瞬間だと考えなければならぬ。ではいったいどういうときだったのか。

2) これらのことを

わかりにくいことの二つ目。21節にあるイエスの祈りのなかにあります。「天地の主であられる父よ。あなたをほめたたえます。」ここまではよい。次です。「あなたはこれらのことを、知恵ある者や賢い者には隠して、幼子たちに現してくださいました。」このなかの「これらのことを」とは何を指すのか。すぐに思いつくのは、直前の「あなた方の名が天に書き記されていること」でしょうか。いや、「サタンが稲妻のように天から落ちた」ことかもしれない。あるいは「敵のあらゆる力に打

ち勝つ権威を授けた」ことだって可能性がある。こう考えると、「これらのこと」の候補になるものが沢山ある。いったいどれを指すのか。イエスが喜びにあふれるほどの重要なことなのに、すぐにわかりません。

2 イエスと弟子たち

1) 幼子たちに

それはなにかということ、内容を詳しく見ていきます。まず21節後半の、「あなたはこれらのことを、知恵ある者や賢い者には隠して、幼子たちに現してくださいました。」に目を留めます。ここに「幼子」とあって、弟子たちのこと、もっと広くとれば、救おうと心に定めた人たち、クリスチャンとなった者たちと読むこともできます。イエスが心に定めて父を現してくださるのは、学問を積んだ賢い者たちではなく、「幼子」だと言っています。

「幼子」と聞くと、赤ちゃんとか幼稚園児のような「小さな子ども」を想像するかも知れませんが、そうではない。こんなふうに考えるよいでしょう。大工になろうと思って親方のところに弟子入りした人のことを考えてみましょう。親方はどうするか。今はそうではないと思いますが、昔は、いきなりのこぎりや金槌を持たせない。掃除や風呂焚きのような下働きをさせたと聞きます。「見習い」ということです。「幼子」はそんな「見習い」というくらいの意味です。イエスはこの七十二人が「幼子」すなわち見習いだと言っている。悪霊を従わせる権威を持っていても、イエスからご覧になると、その程度なんです。

2) 主よ

「見習い」はのこぎりも金槌もさわってはいけません。大工のイロハもほとんどわかっていない。けれども子（イエス）は、そんな見習い、幼子のような者にも、心に定めて父なる神を教えてください。それはどうしてなのでしょう。

七十二人は喜んで帰ってきて、こう報告しました。「主よ。あなたの御名を用いると、悪霊どもでさえ私たちに服従します。」

弟子たちがイエスにどのような呼びかけをしたか注目してください。「主よ」です。これまで弟子たちはイエスのことをどう呼んでいたか。ペテロが湖で最初にイエスに出会ったとき「主よ」と呼んだ

ことが一度だけありましたが、弟子以外の人たちが「主よ」と呼ぶことはあっても、弟子たちはずっと「先生」と呼んでいた。それがいま「主よ」と呼ぶようになった。なぜ主よと呼ぶのか。

その理由は、彼らの報告を聞けば明かです。イエスの御名を用いると悪霊が従った。こんなすごいことができるようにしてくださったので、「先生」ではなく「主よ」と呼ぶようになった。実に単純です。

3) 天に名が書き記されていることを

その弟子たちにイエスは、20節でこう言われます。「しかし、霊どもがあなたがたに服従することを喜ぶのではなく、あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。」

これは二つのことを語っています。一つ目は、すぐにわかることです。悪霊が従うことはホンの些細なことなので、むしろ名が天に書き記されていることを喜びなさい。

二つ目は少しわかりにくいので、説明が必要でしょう。まずこう表現しておきます。「悪霊どもが服従し、サタンが稲妻のように天から落ちる、そのことを見たのだから、あなたがたの名が天に書き記されていることは確実に間違いない。」悪霊が従うことと、名前が天に書きしるされていること、まったく別々のことと思っていたけれど、実は深い関係がある。イエスはそのことを言っている。でもいったいどこでつながるのか。

3 十字架

1) すべてのことが父から渡されている

22節。「すべてのことが、わたしの父からわたしに渡されています。子がだれであるかは、父のほかはだれも知りません。また父がだれであるかは、子と、子が父を現そうと心に定めた者のほかは、だれも知りません。」

前半の「すべてのことが、わたしの父からわたしに渡されています。」「すべてのこと」でいくつか思い浮かぶでしょう。今日の文脈で言えば「敵の力に打ち勝つ権威」、あるいは、サタンを稲妻のように天から落とす力。もう少し深く考えれば、あなた方の名を天に書きしるす権威と言えるかも知れない。すべてが大切なことではありますが、今日の箇所のところに関連して最も重要なことはなにか。

2) 神の国が来ている (11章20節)

ヒントは11章20節にあります。「しかし、わたしが神の指によって悪霊どもを追い出しているのなら、もう神の国はあなたがたのところに来ているのです。」

神の国とは何か、それだけで神学校で何時間も授業をしなければならないくらい深いテーマです。けれども、私たちは幼子のようなものですから、難しく考える必要はない。そのまま素直に受けとめればよい。

弟子たちは、イエスの御名を用いたら悪霊どもが自分たちに従ったと報告しました。これを聞いてイエスも、サタンが稲妻のように天から落ちるのを見たとき、まるで他人事のように語ります。でも、いったい誰がサタンを追い出したのか。イエスです。イエスがサタンを追い出している。イエスがサタンを追い出しているのを見たのなら、神の国は目には見えなくても、あなたがたのところにもう来ている。神の国とはどこか。あなたがたの名が記されいる故郷。本籍地。だから喜びなさい。

そうしますと、疑問として挙げた最初の一つ、「これらのこと」は何を指すか。悪霊どもが追い出され、神の国が来ていること、その結果、天に名が書きしるされていること、それらを指しています。

3) 悪霊を滅ぼすために

こうしてじょじょに、悪霊が従うことと天に名が書き記されていることがつながってくるのが見えてきました。でもどうしてつながるのか。イエスの御名を用いたらどうして悪霊が従ったのか。どうしてサタンが天から落ちたのか。イエスが父なる神からすべてのことをゆだねられていたので、できた。そのとおりですが、それだけではまだ説明が足りません。イエスはどのようにして悪霊に打ち勝つことができたのかを確認したいと思います。

ヘブル書2章14～15節にこうあります。「そういうわけで、子たちがみな血と肉を持っているので、イエスもまた同じように、それらのものをお持ちになりました。それは、死の力を持つ者、すなわち、悪魔をご自分の死によって滅ぼし、死の恐怖によって一生涯奴隷としてつながれていた人々を解放するためでした。」

サタンが天から落ちたのはなぜか。この方が人となられて血と肉を持ち、十字架でそのからだ裂かれ死んでよみがえられたことにより、悪霊を打ち滅ぼしたからです。そうすると、もしこの方が十字架におつきにならなかったならどうなっていたで

しょう。悪霊はイエスに従いません。私たちは死の恐怖の奴隷につながれたままでした。永遠の命はなく、よみがえりはない。天に名前が書き記されることもなかったということになる。

4) 十字架を示す父なる神

ちょうどそのとき、イエスは聖霊に満たされて喜びにあふれました。ちょうどそのときとは、悪霊がイエスの御名を聞いて従ったとき、サタンが天に落ちたとき、そのことで十字架は必ず成就するとはっきり悟ったとき。

十字架を見たイエスはどう思われたでしょう。できるならこの杯を去らせてください、と祈らざるを得なかったほどの十字架です。ほんとうはつらかったのではないですか。喜ぶことなどとてもできない。しかし、イエスのご自分の十字架がはっきり見えたことを喜び、弟子たちにこう言う。

「多くの預言者や王たちは、あなたがたが見ているものを見たいと願ったのに、見られず、あなたがたが聞いていることを聞きたいと願ったのに、聞けませんでした。」

ご自分こそ、旧約聖書で約束された救い主であると語ります。私たちは、この方が救い主であることをどうやって確認するのですか。簡単です。この方が十字架におつきなつたの見て本物だとわかる。

あたかも主はこのように語っているように思います。「わたしが十字架でさばかれるのを見ることになるその目は幸いです。」